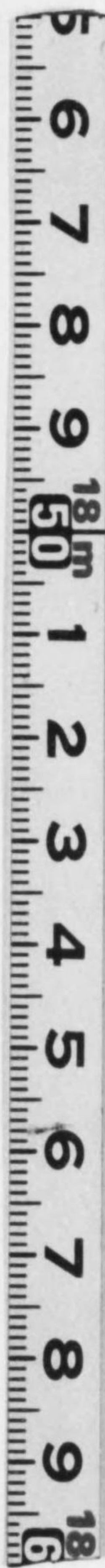


特252

430

順命法師を偲びて



始

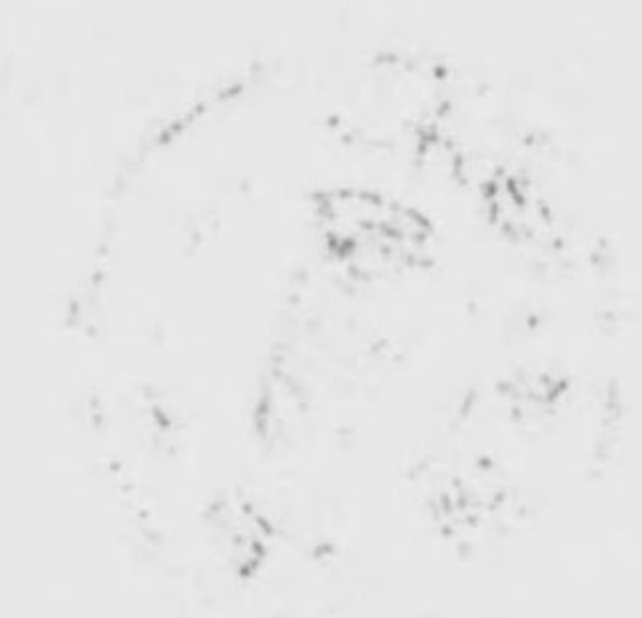


特252
430



順命法師を偲びて

淨





この書を
浄土にゐます兄に捧げまつる

順命法師詠並に書

奉賛
君はくは
まはる人
人よあ
まはるきぬ
まはる文字
世々

偶感
おはまらぬ
夕はし
まらぬは
今の刹那と
まひれ
いま
世々

これは聖徳太子奉讃會の請
みにより揮毫せられしもの

はしがき

慈濟院順命法師が他界致しましてから、はや七七日が近くなりました。その間私も腎臓の手術のため入院中でありましたので葬式にも行かれず速夜にもまゐらず、生前御世話になつた皆さまに一言俵家を代表して御禮が申上げたかつたのでありますが、それも叶はずに過しました。何分突然の出来事でありましたため、私自身も當惑致して居ましたので申譯のないことばかりになりました。あまり急に亡くなつたので、その當時の状況を知りたいと云ふ方々が多いから私にそれを書いて御知らせするやうにと二三の方々からすゝめられますし、私もまたその當時の氣持を書きつけて置きたいと思ひましたが、何分病後の身でまだ持續力がありませぬのでほんの僅少のものを綴りました。あとから讀ん

で見ますとおはづかしいものになつて居りますが、七七日もせまつて居りますのでそのまゝ印刷することに致しました。

『兄の病室に隣りして』の一節は、あの日の日誌でありまして、なるだけありのまゝを記したいと思ひましたがあんなものになりました。

次の『追憶』は順序もなく組織もなく脳裡に浮ぶまゝを書きつけたものであります。あまり主観的になつて居るのでおはづかしいものになりました。然し今更書きかへる勇氣もありませんのでそのまゝで御ゆるしく下さいませ。

○

順命法師には二男三女ありました。いづれもまだ若年でありますが幸に長女の墨江が醫學校を出まして後、岡、飯塚兩先生の御指導により醫學研究中でありましたので、それに業務のあとをつがすことに致しました。まだ未熟であ

り、女子であります、皆さまの御力によりて育て、やつて頂きたいものと希念して居ります。

順命法師の希望から申しますと、墨江には先づ外科の經驗を得させ、續いて内科、婦人科、小兒科と經驗を積み、その後で佛學を兩三年やらせて醫師として願社會に送り出したいと云ふことを私に度び／＼申して居りました。然しそのてひも今は中途にして實務につかねばならぬ事情となりました。

「花散りて實みのるに非ず、花は花として因果し、實は實として因果する」と佛教には申しますが、順命法師は法師の因縁によりて皆さまと深い因縁のうち、に恵まれ愛せられて散つて行きました。墨江は墨江としてこれから皆さまの深い因縁の力に育てられて行くことゝ存じます。親は親の因縁をたどりて生き、子は子の因縁をたどり力一杯に生きて行くのだから、自分の實力と徳性を充分

養ひ、至誠を基礎として業務に當るやう墨江をはげまして居ります。私から申しますと彼女がけなげに働いて居る姿を見ると可愛想であります。これも止むを得ぬことと存じます。どうか最善に育て、やつてくださいませ。

順命法師はその生前よく自身の心の歩みの跡を記録し、又歌などにして書きつけて居たものであります。亡き人を偲ぶにはさうしたものを抄録することがふさわしいことのやうに思ひましたが、今の私にはさうしたことを整理することが出来ませぬので、それは他日のことに致します。そして今はたと皆さまが兄の生前死後に寄せられた御親切に對して心から御禮を申上げるばかりであります。

京都府立醫大病室にて

足利淨圓

昭和十二年四月二十日夜

兄の病室に隣りして

三月十七日

この病院（府立醫大）に来てから今日で三十八日になる。二月十六日横田先生の慈悲の刀で腹をたちわられてから三十日になる。よく生かされたことである。せまい病室には今大文字山からのぞいたばかりの太陽が部屋一杯に輝いて居る。毎日かうして日の出を拜むことがこゝでは其日中の一番楽しい恵まれた時である。なるだけ邪念をはらひ、ぼんやりして居ようと思ふて居る自分の胸の裡にはたえずいゝの思ひが通ふのである。手術臺にのりて腹をたち割られる時辛棒して居た氣持が今日も亦思ひ出される。思ふまいとしても思ひ出さ

れるのである。かうした時お念佛申さんと思ひたつ心で胸が一杯になる。

六

側に立つて居る妻の顔を見る。入院當時トガつて居た妻の顔がこの頃は大部分見なほされるやうになつた。妻にも今度はえらい心配をかけたことである。二月の二十五日(手術後十日)今日は抜糸だと云ふてほゝゑんだ妻の顔はまだ淋しくトガつて居た。夫婦と云ふものは苦樂不可分の因縁の下にあることがしみると思はれる。多くの知友や先輩にも一方ならぬ御心配をかけたことである。取わけ兄俵に心配をかけたことはおびたゞしい。手術後三日にして腸閉塞を起した夜など、私のからだは断崖に乗りかけた自動車の前輪は崖を離れて居る状態にあると云ふて心配して居たその兄の顔を見るのが私は何よりも辛かつた。たとひ自分はこのまゝ往生させて頂いても心残りはないが、これを案じて

居る兄の顔を見ることは死んで行く淋しさ以上に苦しかつた。その兄の顔を兩三日見ないがどうして居られるであらうか。

「兄は兩三日顔を見せられないが依然忙がしくして居られるのであらう。この期節だから又急病人が多いので忙がしくして居られるのであらうと妻に語ると、妻は苦しさを大きな呼吸をした。そして口をもがくさして居る。はてなと思ふた。妻の態度が變である。それは隠すものゝ態度である。自分がこのごろ敏感になつて居るからこんなにへんに思はれるのか知らんと一旦は思ふた。妻は口を幾度かもがくさした後かう云ふた。

「實は兄さんは一昨々晩からこゝに入院せられて居るので……餘程重體なので……早く申上げたいと思ひましたが……あの晩(十五日夜)あなたも餘程發熱せられてきづが化膿するのではないかと云はれたので、甲斐の伯母さん

七

や瑞義伯父さんと相談して黙つて居ました。相すまぬことでありました」と云ふた……。

「病は？」

「急性肺炎です」

と云ひつゝ、妻は遁げるやうに室外に出てしまつた。自分はたゞ啞然たる愕きがあるのみであつた。そして今更の如く佛の御教が眞實であることが痛切に感ぜられた。さうして居る處に「祕密にして居てすまなかつた」と云ひつゝ、甲斐の伯母と妻とが這入つて來た。其當時の光景を伯母の生活手記である『草かご』には次のやうに書かれてある。

人間といふものは愚なものである。同朋舎の淨圓が、幾度か生死の門を出入

したあと、どうやら生きてくれるらしいので、其の兄なる俵順命とゝもに、ヤレ〜と悦んでからまだ幾日もたぬのに。其の兄の順命が、同じ病院の同じ二階で急死する。などゝは夢にも知らなかつた。ほんに人間といふものは、一寸さきのこともう知らぬ愚なものである。

○

今日は楽しい學而會の當日である(論語を聴く會)。朝から香をたき華をいけて、清閑寺伯をはじめ十人ばかりの人々とゝもに團樂し。

顔淵喟然として歎じて曰く。之を仰げば彌高く、之を鑽れば彌堅し。之を瞻れば前に在り、忽焉として後に在り。と孔夫子の偉大さをよい氣分で聞いて居る折から、電話あり。お父さんが突然診察室で昏倒せられた、急性肺炎らしいから直に入院の手續きを取つた、伯母さん來てください。と日頃は男勝り

の墨江も聲をふるはしていふ。すぐにかけつけて共に病院に行つたのは去る十五日の夕方であつた。

○
五室ばかり北にあたる淨圓の病室を訪うことは訪うたけれど。漸く快方に向つたとはいへ、大動脈を括つた糸もまだ離れず、熱度も一定せず、殊にどうした理由か昨夜は安眠が出来ず、悪寒を覚え、熱も八度四分にあがつたといふ。體をベッドに横たへて。俵兄が二三日見えぬがどうしたのであらう、今日ごろは來られるやうな氣がしてならぬけれど。と云うて待つて居る淨圓に。その兄は先刻、ツイその病室に重體となつて運ばれて來て居る。とは如何にしても言ひかねて。俵は風邪でねて居る、と嘘をいうた時はつらかつた。それから二晝夜轉々反側した十七日の朝。いよ／＼うちあけるべく決意して、俵の病室を

出たところに、其の妻みねをが走つて來て。只今私がうちあけました、伯母さんも早う來てくださいといふ。私はみねをに手を合したい氣持ちで、祕密して居てすまなかつたなアといひつゝ、淨圓の病室に入つた。流石に苦悶のいろは見えたが、相變らず常の口調で。

平生一滴の酒も口にせられぬことであるし。例のネバリ強い魂で結構ネバリ通してくださるでせう。若し萬一の事があらうとも、御あんじんの一大事に ついては、毫末の心配もございません。注射して貰うて、碁をうつたあとではいつも宗教談をして居りました。といふよりもいつも私が教へられて居ました。空華はかうであり、石泉の説はかうであり、そこをお祖父さん(義山)はかう説いて居られた、など、青年時代の研學を淳々と説いて聞かしてくださいました。此の人は醫者になるよりも、やはり僧侶で居られたら一かどの佛學者であ

らうのに、をしいことであつた。お祖父さんが醫者になることを、最初反對せられたのも尤もである、と思うたことも度々あります。先達てもいろ／＼尊い議論をかはしたあとで。かやうに議論したり、注射したり、碁をうつたりして居る何も彼も、皆悉く大きなおちからの上でやつて居るのである。とはては互に御念佛してよろこんだことでございます。

かうきかされて、私は一時に左右の重荷をおろした。

淨圓にも打あけぬうち、又瑞義も間にあはぬ、といふ時に大事が襲うて來たら。

マイルハカラヒヨスルニアラズ。マイラシテクダサルヲマツバカリナリ。

と大聲で讀んできかしてやらふと思つて、『義山法語』の本を懐にして、マゴ／＼して居たことが恥しかつた。

○

十八日の午後いよ／＼人生の最大事がせまつて來た。淨圓が兄の手を握つて。あの大きな／＼御力に抱かれて居なさるのですぞツというたら、嬉しさうに、うなづき／＼した。それから御珠數（これは俵が、大長村の小さい蜜柑をつないで作つて私にくれた珠數である）を手に渡したら、一球づゝ指先でくつて靜に淨圓にかへしたあとで。實に驚くほどハツキリした聲で。伯父さん（淨圓のこと）には／＼、A三十グラム、A三十グラム。と女醫なる其の長女すみえに遺言して、やがて靜に眼を閉ぢてしまつた。

かゝる大往生なりしことゆゑ、何も歎くことは要らぬのである。殊に私のやうな老た者は、間もなく再會が出来るのである。さういふ理窟はよく知つて居るけれど、理窟通りに行かぬのが人の情である。

○
 伯母さんが面白さうにやつて居られるけれど、あれは私達の気分を轉換させようためにちがひない。伯母さんとお父さんは普通の伯母甥とは關係がちがふゆゑ、あとで心の疲れが来るに相違ないから、コッロールを注射してあげねばならぬ。かうして居るところを、お父さんもお浄土から見えて悦んで居てくださる。といひ／＼隔日に來て注射してくれる墨江の好意を、たゞ素直にうけて居る私のこのごろである。(月刊雑誌「同朋」四月號より)

兄の病室と自分の病室とはどちらも十三病舎で五六室程へだてゝ居るが續いて居た。直に行つて見たかつたが、あゝした時はわづかのことが苦しんで居るものには障るものである。それを恐れて今逢ふことは遠慮した方がよいと思ふ

た。仰臥して居ると兄の苦闘して居る姿が拂ふても拂ふても胸に映じて來る。刻々に知らせてくれる病狀の報告を聞いて居ると、手術を受けて居る時以上の苦しいものがあつた。自分で自分をしかつてみたり、すかしてみものゝ何の効果もなかつた。自分はこんなに愚痴な男であつたかと幾度か反省したことであつた。

甲斐の伯母は主治醫の飯塚先生を初め、濱中、館石、長村等の諸先生が晝夜詰切りで最善につくして居てくださるのであるから、これで死んでも心残りはないと度び／＼云ひきかしてくださつた。さうしたことをくり返しつゝその日はくれた。

十三日を發病とすれば十九日まで心臟がもてたらそれで峠を越すであらう、どうかさうあつてほしいものと幾度びか思ふた。

三月十八日朝五時頃妻が兄さんの容態がどうもよくない、刻々に苦痛が増すやうである、今親戚の方々に電話を掛けられてあるとおろ／＼聲で告げた。じつと逢はずに耐へて居た自分はそれを聞いて、もうたまらなくなつて起き上つた。そして腹部の傷口を押へてよろ／＼しながら兄の病室に急いだ。この日兄の病室を訪ふたことが前後三回であつた。朝の五時頃と午後の四時頃と落命前二十分頃とであつた。初め兄に逢ふた時は兄の妻が苦痛そのものゝやうに思はれたが、何、明朝までは耐へられるであらう、その元氣は充分あると思ふて、兄の姿を見て、しばし静に辛棒してくださいと云ふたに過ぎなかつた。

○
その次に行つた時は直これが御わかれかなあと思はれた。そして御一生御苦

勞でした。永いあひだ御世話になりました。やがて又お目にかゝります。と云ふやうなことが複雑に胸に往來した。それでも一口最後に佛の御教へを語らうとした。兄の信念は平常よく知つて居る、今更それを語る必要のなきことはよく承知して居た。然しあの場合語らずに居れなかつた。あゝして苦しうにして居る兄の苦痛の片鱗である。生々世々に受けて來た苦痛にくらぶればそれはわづかな苦痛である。今度こそ永劫の苦痛を乗切つて彼岸に渡らうとして居る兄の最後の苦痛である。朝日待つ間の露のやうに希望に輝いて居る兄の苦痛はたゞ尊く思はれた。「静に耐へてください、その苦しみは今しばらくですぞ、今に樂になりますぞ」と云はずに居れなかつた。兄が今どんな心境で居るかと思ふことは自分にはよくわかるやうであつた。兄はよく人間のだんまつまの種々相について語つて聞かせたものである。唯識等で説かれてある死の三相につ

いて現実的にことこまかに聞かせてくれたことがある。そして人間がこの世に生存中は呼吸の續くかぎりは最後までこの世の因縁外のことは縁じられないと云ふことから宿業のはなしをよくしたものである。兎の毛、羊の毛のさきばかりの思念も宿業にあらざるなしと云はれた親鸞聖人の宿業感をよく引いて聞かせてくれたものである。そして老少善惡をえらばれず、さうした人間を絶対に是認せらるゝ彌陀の誓願にあらざれば人間は救はれないことをいつも繰返して居た。兄と宗教を談じたことは久しい。殊に昭和九年自分が大病にかゝつて以來の三年間は、ほとんど一日おきに兄を訪ふた。注射をしてもらひ、棋をうつたあとできつと宗教を談じ佛願力を語つた。それは昭和十一年の十二月の三十一日であつたと思ふ。本年の最後の注射をしてもらうたあと、例によつて棋をうつた。本年もいよく暮れる、お互にかうして棋をうつたり注射したりして

過して居るが、それは水の上の風波のやうなものである、その根底には、その本質には大きな攝取の願力がある、と云ふてお念佛した姿が思ひ出される。自分には注射してもらうのもありがたかつたが、いつも兄の口から出る法語が聞きたさに兄を訪れたものである。

かうした苦痛のなかにある兄に今更佛の教を語る必要はないのであるが、自分は無意識に、その苦痛はうわつらの風波の如きもので、その苦痛の根底は大きな御力に攝取せられてあることが思はれてそのまゝを兄に告げた。兄はうなづいて眼からほろりと涙をこぼした。死ぬるものは泣かぬとよく聞いて居る。兄の涙を見た時、兄はまだ死ぬるのではないと思ふた。これは自分の欲目にさう思へたのであつた。

○

兄の病室に這入る前に（兄が大長の加島さんから小さい蜜柑をもらうて澤山念珠をつくりて知友にわけたことがある）念珠の一つを甲斐の伯母が自分の手に渡されたものを自分は手に握つて居た。自分が兄の手に觸れた刹那、兄は苦痛のなかから自分を見つめてそれを持つてしばし繰つて居た。瑞義伯父の念佛の聲、お浄土には祖母が待つて居られるぞよと云ふて居る伯母の聲、咽鳴して居る義姉の聲、兄の静かに苦痛を耐へて居る嚴然たる姿、さうした嚴肅な室の空氣をみだすことを恐れたが、自分は「これで御わかれます、静にしばし苦痛をたへてください、直ぐ樂になります」と云ふてしばしのわかれを告げた。

○

いよいよ最後であると云ふことを聞いたのが午後八時過ぎであつた。もうおわかれしたのであるからよいと思ひながら今一度兄に逢ひ度くなつた。兄が私

をさがして居るやうだと知らせてくれる人があつた。又よろ／＼と立ち上つて病室に行つた。いよいよ最後が迫つて居る兄の手を握つてやつと、ありがたうございました、御苦労さまでしたと云ふた。兄は自分の顔をじつと見つめて居た。そして側に居た娘のすみゑ女醫に「足利の伯父さんにA三十グラム」と二度まで繰返して云はれた。これは私にコフロールの注射量を云はれたものである。確りしてやつてくれよの意味もふくまれて居たやうである。兄はその最後まで私の健康を氣にかけて居てくださったことが思はれる。かくて兄は間もなく午後八時五十五分静に瞑目せられた。

○

兄の入院以來最善をつくして寢食をわすれて治癒に努力してくださった諸先生方に對してたゞ感謝あるのみである。あゝまでしてくださったのに兄は遂に

逝いた。最善につくして頂いたのであるから心残りのことは少しもない。そして人生に出た一大事因縁を完成して大往生をとげた兄の最後、咲き咲いた花が嵐にあふて散つて行つたらうやましい最後であつた。然しさうは思ふものゝこの胸一杯になつて来る淋しさはどうすることも出来ない。哀別離苦のかなしみは當然受けねばならぬ。哀別離苦は天地に満てる人間の淋しさとなつて私の胸を覆ふて来る。この淋しさを癒すものは地上にはない。何處をさがしても見あたらない。淋しさを癒すものは淋しさである。この淋しさを癒すものはもつと大きな淋しさでなければならぬ。さうした淋しさは法藏菩薩の悲願である。十方衆生の生々世々の淋しさを背景にして生れた弘誓である。この悲願のみが其夜の自分を救ふてくださる唯一つのものであつた。自分はその一夜静に佛の悲願を憶念してお念佛した。午後十時五分兄の骸を乗せた輸送車は静に病室

を出て兄の宅に運ばれた。自分はこのを見送る力も失せて居た。たゞ天地に充滿する淋しさのうちからうまれるお念佛のみが無垢の慰安であつた。げに淋しい一夜であつた。

その夜甲斐の伯母が病室に泊つていろ／＼と自分をなぐさめてくださつた。

追憶

二四

私の腎臓が化膿して血尿が時々出るやうになつてから二十幾年になる。私の中からだのことは一切兄にまかせ切りであつた。兄の云はれるまゝに随順して居た。自分は時々兄を力にして生きて居る自分を省みて、かうした兄を持つて居ることの幸福を感じたことが幾度びあつたか知れない。弱いからだの持主である自分は、兄無くしては過されぬやうに思はれた。私の生存が全く兄の力にさへへられて居たことはいつわりのない事實であつた。

血のつながりから云ふと兄と弟である。幼少にして両親を亡くした二人の孤兒がかうして京都に住んで往來して暮して居る幸福を思ふ時、きつと顔さへ知らぬ両親のことが思はれる。そして両親を思ふごとに兄を慈父の如く思ひ、

義姉を慈母の如く思ふた。

私が旅に出ることを告げると兄はよろこばなかつた。旅行もしたいであらうがまたあとで苦しみますぞと云はれて食物などの注意を與へてくださった。

二十幾年間病みつゞけて來た自分の痼疾である腎臓の化膿について、兄は一度も切開手術を受けよと云はれなかつた。自信を以て病を養ふてくれられた。然るに今年の一月の十六日出血した時その血尿を一見すると直ぐ、これは從來の出血とちがつて居る、いよ／＼時が來た、これは腎臓を剔出せなければならぬと告げられた。自分はこれまでによく手術臺に載せられた人々の心境を想像して恐れを抱いて居たものである。それが今自分の身上になつて來ると恐れと愕きとを感ぜずに居れなかつた。

私は昨秋以來、來年の花は見られぬであらうとよく思ふた。いよ／＼時が來

二五

たとすればそれはかねて覺悟して居たことで止むを得ないことである。然し手術を受けることについては何等心の用意もして居ない。しばらく考へさしてくださいと云ふた。

兄は云はれた。四年前のおまへの大病は急性肺炎であつたため、ましてしはなしに虚脱状態におちゐつたので心の用意もなかつたことであらう。然し今度は二三週間かゝつて充分心の用意を調へるがよい。手術臺に上る心境を味嘗してそこに大きな意味を發見することは有意義である。ごまかしてはいけない、遁げてもいけない、微細に味嘗するがよい、地上のことは出来湧いた事柄を遁れやうとせずに謹んで受取つて行くより外に道はない。そこに聞法の喜びがある。醫者から云ふともう遁れやうのないドタン場に來て居るのだから退て考へるよりは進んで切開してもらふことだ。親鸞聖人が「娑婆永劫の苦をすて、」

とおつしやつてあるが、永年の病根を剔出すると今度は人生のはれ／＼した氣持が味嘗出来るであらう。然しそれは結果についてある。結果よりもさうせねばならぬやうになつて居る自分自身を問題にして見ることだ。よく考へて心の用意を充分に調へなさいと云はれた。

○

それは二月の七日であつた。血尿もとまり、からだも快復した。やつと心の用意もどうやら出來たやうである。安心して切開して頂きますと兄に告げた。兄はあはれむ如く自分を見て居た。それでは明日手続きをして八日入院するかと云はれた。自分は決心はして居るものゝから快くなるとその決心がにぶつて來ることがあると云ふと兄は淋しく笑ひながらうなづいた。そしてこれがこのまゝにして置いて若し破裂すると恐らく二時間をまたぬであらう。自分がかけ

つけるをまたずして死んで居るであらうと云はれた。

「それでもよいではないですか、どちらにしても亡くなるのだから」と自分が云ふと、

「君はそれでよいか知らぬがあとに残つた私が淋しい、お互にあまり永いこと生きては居ないであらうが、まあ出来るだけのことはやつて見ないとわからない。人生の事務は一生涯大きな心配を抱いてそれを最善にやつて行くやうに出て居る。明日のことがわかるやうなら證りの宗教で行くのだが、明日のことのわからぬものは往生の宗教でなければ救はれぬ」と云はれた。

豫定の如く二月八日に入院して、その後準備に八日間の時日を過した。いよ／＼二月十六日に横田先生の執刀によりて手術を受けた。其後の経過についても一喜一憂であつた。主任醫の畑先生にも御心配をかけた。其の間或は喜び或

は憂へて居た兄の顔は今でも忘れることが出来ぬ。それは手術後五日目の晩であつた。兄が自分でこしらへてわざ／＼病院に持つて来てくだされたスープの瓶が一つ残つて居る。兄の亡くなつた後自分はその瓶を見ると眼がうるんで来る。そして兄の無限の慈愛を感じずに居られない。

「君はそれでよいか知らぬがあとに残つた自分が淋しい」と云はれた兄の言葉は、其のまゝ今の自分の心境となつてしまつた。

かうした兄の思ひ出を書きつけようとする、思ひは無限に續く。書いても書いても盡きないものがある。かうした思ひ出をよく反省すると皆かへらない愚痴のかず／＼である。そしてそれらの愚痴は皆自分の欲から出發して居るあさましい心根であるとき々自分で自分をしかつて見ることがある。兄が生きて居てくれた方が自分に便利であるからさう思ふて居るのではないかとも思はれ

て、兄を思ふ情も眞實ではなくて自分の便利からである。あくまで醜い自分であると思ふこともある。兄自身としては「娑婆永劫の苦をすて、無上涅槃を期すること」と、私が手術を受けた時云ふたやうに、兄は永劫の苦をすて、涅槃のみやこに往つてしまつたのである。兄の死顔にはあらゆる苦を超えて静に涅槃のみやこに往つたものゝ楽しさを物語るやうな相好があつた。「祖聖の御教にたまふ遇ふことによりてこの度びこそは浄土にまゐるべし」、「凡てのことは彼岸に至りて明了となるべし」、「人間の世では人間の世界の因縁以外のことは思はれざるべし、たゞその因縁によりて最善に働くべし、たゞこゝに一つ人間の世界以外のものあるべし、そは悟界から来る十方衆生の苦惱を基調とした佛の弘誓から生じたお念佛がある」と。以上は兄と宗教を談ずる時よく兄の云ふた言葉の片々である。兄は人間の苦と云ふことについて、永劫の苦の連続と

現前の苦とを區別して云ふたものである。現前の苦は片々たる苦で永劫連続する苦に比較すれば、それはほんの苦の片鱗に過ぎないものである。そこに、「この度びこそは浄土にまゐるべし」と云ふた「この度び」と云ふ言葉に云ひ知れぬ深甚の意味を兄は感ぜられて居られたやうである。

○
この頃の自分は愚痴が出るとそれを自分でしかり飛ばして居る。自分の便利のために兄の生存を願ふやうなあさましい心持は拂ひ去りたいと思ふてつとめて居る。兄の一生を通じてあつた出来事について思ふ時、人間のつまらなさが思はれる。

六十年間懸命に働いてくれてそしてその結果として裸にして追ひ出すと云ふ廣告が新聞にでも出て居たなら自分はいきどほるであらう。人間は一生苦闘せ

なければならぬ業障に引づられて居るものである。そしてその結果裸で死んで行くのである。兄の六十年間の苦闘の跡をたゞ偲ふとさうした理屈も云ひたくなる。然し兄の一生は苦闘は苦闘であつたが單なる苦闘ではなかつた。その一生を貫いて人間の一大事因縁を成就して往た。地上に生れた本懐を完成して、この度びこそは淨土に渡脱すべしと云ふて居たとほりに渡脱して往た若き日の兄は一途に佛の教を學んだ人である。後の日の兄は醫者となつて人生の痛苦に直參して佛の聲を實人生のうちに聞く人となつた。兄は一言の説法を爲さなかつた。然し兄は苦惱せる病者のうめきのうちに佛の聲を聞いた。兄は人間の不安の底にひらめいて居る佛の誓願に耳傾けた。かうした意味から云へば兄の一生は求道歷程であり、開法の一生であつたことが思へる。

然しよく反省すると自分には大事な兄であつてたゞよい兄と思ふて居ても、

他の人から見らるゝと兄は多くの缺點の持主であつたことが思はれる。それは否めない事實である。兄は多くの缺點を持つて居た。然しそれは兄が地上にありて人間の業縁に引かれて居た時の兄で、亡くなつた後の兄は淨化しきつた兄となつて居る。何等のけがれもなく、何等の苦痛もない至純な身となつて居る。虚無の身、無極の體となつて居る。自分はそれを少しも疑ふことが出来ぬ。自分分は安らかに瞑目して居る兄の姿を見てさう思はれた。自分の今執つて居る筆で文字をさら／＼と書いて居ることを疑ふて居ないやうに、兄の度脱せしことについて少しも疑ふては居ない。そこに自分にはれ／＼した氣持で兄を偲ぶことが出来る。「娑婆永劫の苦をすて」と、自分が手術臺に上る時兄の云ふてくれた言葉は、兄の今の身の上であると同時に今の私の身の上である。兄は其の身を没してもつと廣い視野に入つたと同時に、自分の視野も兄の死によつてい

よ／＼開けて無限大のものとなつた。

兄は遠方に去つたのではない、そこに迷悟の區別はあるが自分は兄と離れて居らぬ。兄が自分のうちに來て自分と一緒にやつて自分のうちに住して居る。そして自分に遠きは近きなり、近きは遠きなり、深きは淺きなり、淺きは深きなりの視野を自分に開かしてくれた兄の死は、身を以て不説の大説法を自分にしてくれた者であつたことが思はれる。自分が住正定聚の身であることの意味をいよ／＼明かにしてくれた。

○

今日K氏が訪れられて、兄の亡くなつたことに對して自分のやうな病人はほんたうに困る、云ふてかへらぬことながら今後どうしたらよいかとそれのみを案じて居ると云はれて、それは御本人にすればお淨土に往かれて樂であらうが

西方十萬億の彼方ではつまらぬと云ふて泣かれた。Kさんの御言葉には自分も一應同感である。然し自分はKさんとはちがつたものを感じて居る。自分は兄が瞑目した刹那に淨化しきつた兄となつて自分に呼びかけて居る兄の聲を聞いた。それは南無阿彌陀佛と云ふ聲のうちにあつて、自分にほがらかに呼びかけて居る兄の聲を聞いた。自分はかつて友の亡くなつた時、

いまははやかたらんとして言葉なし

御名をとなへて問ひつ答へつ

と云ふたことがある。今瞑目したばかりの兄は直ちに自分の胸のうちに還相して自分を先づ第一に開化してくれた。兄は十萬億の西方に居らぬ。それは迷悟のへだたりから云ふたらその感覺は西方十萬億土とも云ふ可きであらう。然し兄は忽然自分の煩惱の林のなかに遊化し自分のはてしなき迷ひの園に入つて自

分を應化してくれてある。自分としてはこの事實を否定することは出来ぬ。亡くなつた兄は私のむねのうちによみがへつて来て、私の痛苦を救ふてくれた以上、上の力を以て自分の全體を救ふてくださるものとなつて居られる。

親鸞聖人が

彌陀觀音大勢至

大願の船に乗じてぞ

生死の園に浮びつゝ

有情をよぼうて乗せたまふ

と云ふて居らるゝ迷悟の感覺から云ふと、十萬億の彼方に逝た兄はけがれなき至純無垢の相好に於て彌陀觀音勢至と共に自分に呼びかけて、はてしなき生死海に沈んで居る自分の心を開化して難思海の不思議の視野を自分に與へて居

られる。人間としての兄は差別界にあつて眞理に反する生活者であつたらう。然るに今は誓願の不思議に救はれて眞如の理に冥合する身となつた。眞如の理に冥合した身には永遠に名とか相とかの囚はれた執着がない。差別の世界にあるやうな彼れとか是とか云ふ執着もなく、取るとか捨てるとか云ふ囚はれもない。自然に萬法を照し、大悲息むことなく、機に隨ひて化を施し、煩惱のある處、苦惱の生ず處。至らずと云ふことなしと云ふ身になつて居られるであらう。地上に居た時の兄の生は因縁に依つて所成せられた煩惱の寄せ木細工のやうな生であつた。さうした寄せ木細工の兄はくだけただかれて、阿彌陀佛の願力のうちに完全に歸しおぼせた。生は寄である、死は歸である、終歸する處に終歸して往たのである。靜に彼岸を念じて感謝のお念佛する時兄の聲を聞くことが出来る。淋しい此岸にあつて、彼岸から來る兄の聲を聞くことが出来る。

不思議なことのあつたものである。テレビジョンの作用によつてロンドンと日本との通話が出来ると云ふことを聞いて居るが、自分は兄と迷悟の境を異にしなから兄と通話することが出来る。さうした時の自分はさながら六神通の一つなる天耳通を得たやうな喜びを感ずるものである。そして亡き兄と自分との通話が通譯なしにわかるやうに育てられた誓願の不思議、相遇ふことのありがたさをしみ／＼思ふものである。

生前の兄と自分とは時々相逢ふて語つた。然るに今の兄と自分とは時々ではない、行住坐臥一緒である。語らんとすればいつでも語られる。兄は他界してからいよ／＼近くなつたことが思はれる。

今どうにか健康になつて退院できたことを兄はどんなにか喜んでゐてくれることであらう。

昭和十二年五月五日 印刷
昭和十二年五月十日 發行

發行所

藤澤 潤

印刷者

同朋 舎

發行所

京都市壬生川通五條下

同朋 舎 出版部

373
77

終

